

「みちのく」と名所

田尻 嘉信

一

和歌史上、「みちのく」とのゆかりは平安以降著しく、多くの歌に知られるところである。中でも重之・能因・実方・西行のよう
に、險路をつぶさに踏んだ人びとの逸事は諸書に載った。これら風
流好士の系譜は、後発の文学にも大きく影響を与えている。雲煙の
かなたに位するこの地域が、鮮やかな詩情に彩られたことは、不思
議なほどである。その機縁となったのは、先故の名残をとどめて諸
所に点在する名所であった。小稿では、この「みちのく」への愛著
の実情を、名所史の視点で考えてみたい。

二

顕昭『古今集顕注』に、次の一節がある。

陸奥国と書て、みちのおくのくにとよむなり。歌にはみちのお

くとよむを略して、みちのくとも書けり。世俗にみちのくにと
申すは、歌の詞にあらず。ましてむつの国と申す無下のことな
り。

音教からみて、「みちのおく」より「みちのく」が軽快なのは明
らかである。歌詞に「みちのおく」は確かにみられない。「みち
のくに」は六首（金葉集〈連歌〉692 古今六帖 集方 279 能因 集 208 有房 189 金槐集 永成・慶範 古今七六二 集方 279 能因 集 208 有房 189 二九六 八四）ほどある。「無下」との評の「むつの国」は無論ないが、「むつ
のく」の珍しい一例が西行の著名歌にある。『夫木抄』（卷三五）では
「みちのく」として採る次の一首である。

むつのくの奥ゆかしくぞおもほゆる壺そとの浜風（山家集 中・雑1011）

このように歌の世界に「みちのく」が定著するまでには、この地
域特有のかなり長期の歴史があった。普遍名としての「陸奥国」の
初見は、『日本書紀』（七卷）の景行天皇四〇〇年の条、日本武尊東征の
記事である。同条には、別に「日高見国」（多賀城の北方、北 上川下流の地域）の名もみ

える。しかし、政治上の区割として、ある程度実質を備えた用例とみられるのは、同書^(卷第二)「天武天皇五年正月甲子(六七六)の詔とならう。それには、「凡任国司者、除畿内及陸奥・長門国^(一)、以外皆任三大山位以下人」と示されている。陸奥・長門の両国が、畿内に准じて高位者の任命となっている。東北・西海の辺防が重視されたからであろう。その後、大宝二年八月(七〇二)「大宝令」の公布によって、畿内・七道の区分が制度的に整えられることになる。「陸奥国」も、次第に中央の東北支配の中に位置づけられたといえようか。

猶、「斉明紀」^(卷第二)五年(六五九)の条には、「陸奥」のほかに「道奥」の用例もみられる。『日本古典文学大系』本では、「景行」「天武」両紀の「陸奥」は「むつ」と訓み、「斉明紀」は「みちのく」としている。「道奥」の訓は示されないが、いうまでもなく「みちのおく」であろう。「陸奥」の「むつ」は、「陸」を「ろく」と音読し、「六」に転用の上で訓としたものである。「天武紀」以後の「陸奥」の用法は、好字に改めたものであろう。書き改めたにしても、僻遠の蕃地であることに変わりはなかった。西高東低の国情では、この地域は「道奥」の呼称が本来もつとも自然であったようにみえる。道制の発足にかかわりなく、東の海道・山道の奥に位置するとの認識である。

この「みちのおく」の史書への登場は、同地在住の蝦夷との関連に終始しているようである。『日本書紀』『続日本紀』を通じて、その筆法はさながら中国の夷狄観を髣髴する。「蝦夷」の実体には

諸説があるが、中央の東北経略はこれの鎮庄が第一の眼目となっている。承和二年(八三五)の官符に、「置^(一)刻以来千今四百余歲矣」^(類聚三代格卷二八)とある。菊多・白河の両刻は、施策の嚆矢ともみられようか。養老四年(七二二)、陸奥按察使が反乱の蝦夷に殺害され、持節征夷將軍が発令される。神龜元年(七二四)には、大掾が同じく難に遭い、陸奥鎮守府の名が記録にあらわれる。のち天平神護二年(七六六)、大宰府による防人の派遣要請に、廟議は「修理陸奥城柵多興^(一)東国力役^(二)」^(卷第三)と示達している。天武詔にうかがわれる辺防の危惧は、なかなか尽きなかったようである。脅威への対応は、日本海側の地域にも及んだ。「斉明紀」四年(六五八)、阿倍臣による遠征があった。やがて和銅五年(七二二)出羽国が分置されると、反徒は「蝦狄」とされ、鎮狄將軍を任命、その征討がはかられたのである。

治政の実をあげるに多難であったが、この地域は陸奥・出羽二国の設置によって、順次中央の体制に組み入れられた。支配の版図は拡がり、『延喜式』^(卷第三)には東山道に遠国として両国が載り、陸奥国三五郡・出羽国一一郡が記されている。三五郡は全国でも最多の郡数であり、次位の武蔵国二郡を大幅に上廻っている。その陸奥国は菊多・白河両郡を南限に、江刺・胆沢両郡を北限とする地域である。

『日本後紀』^(卷第二)には、弘仁二年正月十一日(八一二)の条に、「於陸奥国置^(一)和我・韓縫・斯波三郡^(二)」と新たな建郡が示されている。この三郡は、江刺・胆沢以北の地である。因みに、『延喜式』

の撰上は延長五年二月(九二七)、『日本後紀』は承和八年二月(八四二)であった。八〇年余を経た前者に、新三郡の除かれていくことは不思議である。延暦二年(八〇三)の坂上田村麻呂「斯波城」を承けて、弘仁二年文室綿麻呂の北征は、閉伊・武薩体に進められた。徳丹城の設置はその時期か、「胆沢・徳丹二城、遠去三國府・孤居三塞表、城下及津輕狹野心難測」(日本後紀卷第二四(弘仁五年一一一—一一七)条)の記事がある。翌年には、廢城となつていようである。國府と鎮守府とが多賀城に置かれて、「府国並行」(弘原鈔下)が定著したのは聖武朝とみられようか。北征の地方拠点となる徳丹の築城と、早急な廢止は、軍事上の便宜に限られたかのようである。徳丹を含む『日本後紀』の建郡の地域は、記載の弘仁期には北征の渦中であつた。政治的な支配、服属の關係が安定を得るには、当然相應の期間が必要である。『延喜式』の記載も、あるいはそのこととの関連があつたかも知れない。

『延喜式』を隔ることのすくない『和名抄』(卷七)も、同様に三五郡がみえるが、はじめて一五二(高山)の郷名を掲げている。「みちのおく」が時代とともに、次第に奥地への開拓を進められたのは確かである。下つて『大和物語』(一五二段)に「岩手の郡」、「古今六帖」(卷二七七五)には「岩手山」と、かつての版図を超える地名があらわれてくる。これが先達となつて、「岩手山」の詠はやがて『千載集』(卷一一)の顯輔(690)・顯昭(662)にあらわれる。また関連する岩手岡が『江帥集』(區房393)・岩手岡が『俊忠集』(Ⅱ, 33)にあらわれたりする。その天地は「奥ゆかし」と詠まれたのも肯ける

ように、遠く遙かな地平のかなたに及んだのである。

西行のほか、清輔(家集389)頼朝(維新1785)に詠まれた「壺の碑」は、陸奥国上北郡天間林村天間館の坪の地にあり、旧称都母である。芭蕉『奥の細道』では多賀城碑と混同されているが、それでは位置關係が並称された「そとの浜」と不釣り合いになる。「そとの浜」は同国東津軽郡三厩村、津軽海峡に臨む海岸一帯をさしている。両所とも最北の地であり、さすがに歌数はすくなく、右にあげた程度である。『八雲御抄』(卷五)の名所部にも採られてはいない。『夫木抄』も前述西行を除いては、清輔(卷第三)のみである。

またこれに類する名所に、「えぞが千嶋」がある。前述『袖中抄』「碑」の条に、「えぞの嶋は多くて千嶋と云ば」とあり、『八雲御抄』に「えぞが千嶋」と採られる同所は、所在未詳ながらいくらか例が多い。『夫木抄』「嶋」(卷三)に「千嶋のえぞ」の歌詞で顯輔(家集104)清輔(家集242)、「千嶋の奥」で顯昭(六六番歌合・遠恋一六番左負)があり、「鳥」(卷二七)に「えぞが千嶋」で公朝と都合四首を数える。顯輔・清輔はその歌詞に家集とは異同があつて、判然とはしがない。「えぞが千嶋」はさらに『拾玉集』(1333)にあり、『山家集』にもみられるが、『日本古典文学大系』本(雑中、1094)『日本古典全書』本(雑中、1094)で異同があり、後者がその歌詞となっている。

このように平安末期から中世にかけては、「みちのおく」ゆかりの特定の歌人にとつても、遂に未踏であつた辺境の地までが詠まれるのである。その経緯からして、現実には歌の世界とは著しく異つた

相貌を呈していたとみられる「みちのおく」である。略して「みちのおく」となることで、多少は圭角がとれて安らいだ響きを帯びたにしても、幾山河を隔てて、何の違和もないほどに中央化されたとは思われない。用いられた名所の観念性を指摘するのは容易であるが、和歌史にみるこの遙かな地への傾斜は、やはり格別のものがあったといわなければならないのである。

三

『万葉集』の「みちのおく」関係の歌は、それほど多くない。例えば、卷一四相聞に「右三首陸奥国歌」と左註される次の歌がある。

会津嶺の国をさ遠み逢はなはは偃びにせもと紐結ばさね³⁴²⁶
筑紫なるにほふ児ゆゑに陸奥の可刀利少女の結びし紐解く³⁴²⁷
安太多良の嶺に臥す鹿猪のありつとも吾は到らむ寝処な去りそね³⁴²⁸

いずれも作者未詳である。第一は会津を出て旅に上る男の歌、立ちに妻が男の紐を結ぶのは当時の風習で、人麻呂鞍旅歌(恋)ほかにみえる。第二は「可刀利」の里人が、筑紫に赴いた際の歌である。筑紫は防人の連想となるが、陸奥からの徴発はない。「可刀利」は所在未詳、『大日本地名辞書』(巻七)に、陸奥国桃生郡香取伊豆乃御子神社の記載がある。第三は、鹿猪が寝所を忘れずに戻ってくる習性(童蒙抄第九「色葉和雜集巻七」)を譬喩とする。ア音が韻の効果を作っている。狩猟に明け暮れる山人の歌である。安太多良の嶺は、『袖中抄』(第一五「あだ」)に、「能因歌枕に云、あだたらね、有、

神峯云々」とある。岩代国安達郡の安達太良山のことである。

同巻の譬喩歌にも、安太多良に因む次の一首がある。

陸奥の安太多良真弓弾き置きて反らしめきなば³⁴³⁷ 弦着かめかも

安太多良真弓は、安達郡で産する弓である。それを譬喩に用いている。「反らしめきなば」は男の自由勝手な振舞をさし、以下の状態では女との関係が旧に戻ることは不可能の意とする。下句の詞にひなぶりがあり、譬喩もおもしろい。「陸奥国歌」との註はあるものの、東国の人が陸奥銘産の弓を材として、作ったともみられるような一首である。

巻七の譬喩歌にも、寄弓として次の例がある。

陸奥の安太多良真弓弦はけて引かばか人のわを言なさむ¹³²⁹

上句は「引く」の序に近いが、やはりここは譬喩とされている。

「弦はけて引かば」に、男が相手の女を引き寄せるの意がある。この歌には「陸奥国歌」の左註はないが、前歌と似ている。『童蒙抄』(第五)はこの歌を引き、「あだたらま弓とは、あだちのしらまゆみなり」といっている。事実、『古今集』(巻一〇78)では、「安達のみ弓」の詞となり、のちの歌史もそれを襲っている。なお前述『袖中抄』の条に、『童蒙抄』「あだたらま弓」でさきの鹿猪の一首をあげているとして、「不知案内二歌」とするのは不審である。

さて、右に述べた巻一四の各例は、「東歌」として載るものの一節である。同巻では国名未勘を除いて、相聞往来歌、譬喩歌ともに東海道、ついで東山道の順に諸国を排列しているようである。前者

は遠江以遠、後者では信濃以遠の諸国である。陸奥は、どの場合にも末尾に置かれている。また歌数でみると、相聞往来歌七六首に対して、譬喩歌はすくなく九首である。国ごとの歌数では、相聞往来の場合、上野二首・相模一二首・常陸一〇首・武蔵九首が目立つ。陸奥よりすくない国もある。譬喩では駿河・相模が各三首のはかは一首づつで、あまり差はない。これを陸奥と、それを除く東国と対比すると、四首と八一首となって大きな開きがでてくる。陸奥がひろく東国圏に属するとみても、辺境の特殊な一國との感はまぬかれなかつたであろう。「東歌」の標示にこめられる在地性は、「陸奥国歌」にもつともあてはまる属性であつたといえよう。

この在地型に対して、都の側での陸奥の歌が若干ある。よく知られるのは、卷一八に「賀_三陸奥国出_レ金詔書_一哥一首并短歌」との題詞で載る家持の歌群である。長歌⁽⁴⁰⁹⁴⁾と反歌三首^(4095 4096 4097)で構成されている。東大寺大仏造営の際、黄金の欠乏に窮しているときに、陸奥国より産金の奏上があつた。『統日本紀』(卷一七)に、「天平廿一年二月丁巳(七四九)陸奥国始貢_三黄金、於是奉_レ幣以告畿内七道諸社」との記事がある。聖武天皇はこの瑞祥を喜ばれ、四月一日東大寺に行幸、詔を下して仏の恩を讃え、百官人もそれを礼拝すべきことを諭された。その日、天平二一年を改めて天平感宝元年とされている。歌群は応詔歌であるが、左註に「天平感宝元年五月一二日於_三越中国守館大伴宿彌家持作_レ之」とある。家持は任国で詔に接した感懐を詠んだのである。詔に家祖の功業の賞美されたことに感奮し、また従五位上に昇進の沙汰を拝した喜悅も重なつたと

みられる。一〇七句より成る長歌は莊重雄勁で、前段は天孫降臨に始まり、歴代の繁栄から今上の大仏造営に及んでいる。陸奥国産金については、「鶉が鳴く 東の國の 陸奥の 小田なる山に 黄金ありと 奏し賜へれ」との歌句にあらわれる。後段には、詔詞のありがたさに応え奉る真情を、「海行かば 水漬く屍」以下の家訓に披瀝している。反歌は第一首に益荒雄の勇猛心を、第二首に大伴氏の榮譽ある家柄を詠んでいる。第三首は、

すめろぎの御代栄えむと東なる陸奥山に黄金花咲く

となつている。黄金の産出を慶賀し、御代の栄えをことほぐ心である。光り輝く黄金を花に譬えて、「黄金花咲く」としたのは壯麗で、作者の創意があらわれている。式内社の小田郡黄金山神社は、その地を示している。陸前国遠田郡涌谷であり、黄金迫の字がある。右の歌詞にある「陸奥」は、長歌・短歌ともに「美知能久(夜麻)」の表記で、「みちのく」がすでに定着しているようである。

次にあげるのは、卷一六の有由縁并雑歌に載る一首である。

安積山影さへみゆる山の井の浅き心にわが思はなくに⁽³⁸⁶⁷⁾

これには左註に、「右歌云云葛城王遣_三于陸奥国_二之時、国司祇承緩怠異甚、於時王意不_レ悦怒色顯_レ面、雖設_三飲饌不_レ肯宴案、於是_二有三采女_一風流娘子、左手捧_レ勝右手持_レ水、擊_三之王膝_二而詠其歌、爾乃王意解脫案飲終日」と仔細が記されている。もともと、不可解な点がすくなくない。葛城王は橘諸兄説が有力ながら、未詳である。また地名に安積山が詠まれていて、「国司祇承緩怠異甚」とある。この付近に陸奥の国府が置かれた記録はないようである。『奥

義抄』(中歌、後撰歌四九)に、「みちのくにの館は武隈(名取郡)といふ所にあり」の一節もあるが、国府所在地とみるには時代が新しすぎる。ついで、「前采女」である。「孝徳紀」大化二年四月(六四〇)に采女貢進が規定されるが、『統日本紀』(卷二)大宝二年四月一日(七〇二)の条に、「令筑紫七国及越後国箇点采女兵衛貢上之、但陸奥国勿レ貢」とある。この時期、陸奥国が貢進できる状況にあったとは考えにくい。「勿レ貢」は、従来のように貢進せずとも可といった意味合いにとれる。上記の国は貢進の例がなかったのを、更めて命ぜられたものであろうか。

「前采女」は出自が未詳ながら、宮廷に仕えた経験が、「風流娘子」の評となつたとみられる。接待にあつた作者は、付近の山名を詠みこんだ機智で王の心を和ませることができた。上三句は「浅き」を導く有心の序、安積山は岩代国安積郡にあり、陸奥への駅路に望見された山であらうか。

いま一首は、卷三の譬喩歌に「笠女郎贈大伴宿禰家持歌三首」の題詞をもつ中の第二歌である。

陸奥の真野のかや原遠けども面影にして見ゆとふものを(396)

この「真野のかや原」は、磐城国相馬郡真野(和名抄、陸奥国行方郡)の地内である。紛らわしい地名に「真野の榛原」(280 281 166 1354)がある。この方は摂津国である。ともに「真野」を冠するので、のちに「同名名所」(并肆抄)の詮議のもとになっている。未踏の地を材として、遠く離れた人の面影を髣髴することを詠んでいる。その点、第一歌、

託馬野に生ふる紫衣にしめいまだ着すして色にいでにけり(395)

も同工ながら、託馬野は近江国坂田郡である。距離感の上で「真野のかや原」の比ではない。また託馬野の歌では、譬喩歌に加えられているとおり、紫の衣に譬えて「色にいでにけり」としている。しかし、「真野のかや原」の方は、一、二句を「遠けども」の序とみたい。作者の脳裡に描かれたその地の光景は、どのようなものであつたらうか。意表を衝くように遠国の地名を用いて、恋情を訴える技法は鮮やかである。従駕や地方官の赴任など、作者と密着する特定の地名の表現が大勢を占める中で、これは明らかに出色といつていい。次の時代に新風をみせる名所の表現が、予見されているような一首である。

『万葉集』の「みちのく」関係の歌は、以上のとおりである。在地型に較べると、都人型はさすがに表現に優雅で洗練されたものがある。しかし、のちの時代への影響という点では、両者にはほとんど径庭はない。在地型で前述「古今集」に基づく「安達のまじり」、都人型では、平安末に叙景歌に転生を示す「真野のかや原」、『大和物語』(一五五段)・『古今六帖』(第三一八六一同あり)に載る「安積山」がある。その「安積山」も、『古今集』(恋四)の「安積沼」の方が中心に後流を作ることになる。会津嶺・安太多良嶺・小田山・陸奥山など、全く埋没してしまふのである。歌論書にも所見は、勿論すくない。『能因歌枕』(広本)の「国々の所々名」は出拠・所在ともに未詳が多いが、その陸奥国四二例に採られたものはない。また『初学抄』の「古歌詞」の万葉例・「万葉集所名」・「読習所名」のいずれにもみあたらない。わずかに「所名」に、「アサカ

山 山ノ井アリ アサキコトニソフ」とあるのが、貴重な一例となつている。『八雲御抄』が小田山を除いて他を載せるのは、史的な集大成の意図によるとみられ、事情を異にする。

地名の痕跡が消失するのは「東歌」一般の傾向ながら、実地に即した万葉陸奥は著しいようである。のちの「みちのく」への関心が、「奥ゆかし」の志向をもち、奈良朝の磐城・岩代・会津の線を越えて、未知の天地を求めたことに因があった。『伊勢物語』前段の東路への漂泊は、早期のあらわれとみることができ。それは『古今集』（巻二〇）「東歌」の陸奥歌などの詩情を介して、いっそう増幅されたようである。陸奥国の形成過程とも絡んで、特殊な事情を示しているのである。

四

『古今集』の離別歌に、貫之の次の一首がある。

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける

白雲の八重にかさなるをちにも思はむ人に心隔つな御（鑑）

陸奥はまさしく「白雲の八重にかさなるをち」であり、そのことばに覆いがたい距離の実感がともなってくる。幾重とも知れぬ雲のかなたへの旅立ちとあれば、別離の情にもひとしお迫るものがあろう。その遙かな天地が都人の世界に待望され、撰取されていく経過は、『伊勢物語』に端的に示されているようである。貴種流離とされるその東下りの条々である。「昔、男」はあり佗びて、京を住み憂きものとする。その気持は、やがて「京にはあらじ」とつきつめ

たものとなっていく。そのときに住むべき国として「あづま」が意識され、不案内の道に哀歎の日数を重ねて、「みちのくに」に到るのである。

栗原の姉齒の松の人ならば都のつとにいざといはましを（四段）
この国への憧憬は愛着と親近になり、「都のつと」にまで心をそそられるままに、場面は次に移っていく。「栗原」は陸前国栗原郡、「姉齒の松」は同郡沢辺村大字姉齒の地である。栗原郡は陸中国に接し、この物語の陸奥では最北の地を占める。八一段「塩釜」（宮城郡）、一一五段の『古今集』巻一〇・小町の墨滅歌による「おきのゐ」（宮城郡）「都島」（同郡）の順に南になってくる。次の段の「信天山」は、岩代国信夫郡である。

信天山しのびてかよふ道もがな人の心の奥も見るべく
「なでふなきめ」の「あやしうさやうにてあるべきめともあらず見えければ」として贈ったのが、この歌である。ひたすらな思いをこめて、相手の心の奥にわけ入ろうとする切実さがあらわれている。慕情の深さとともに、眼識の確かさもうかがわれる。さながら都人の、陸奥に寄せる心事が象徴されているようである。この一段に漂泊の筆をとどめているのも、「奥を見るべく」まことに余情尽きぬものがある。

八一段には、河原院の作庭に因む次の一節がある。

みちの国にいきたりけるに、あやしうおもしろき所／＼多かりけり。わがみかど六十余国の中に、塩釜といふところに似たるところなかりけり。

河原院は、庭に模した「塩釜浦」でとくに知られた。この段は、融が陸奥出羽按察使(貞観六年三月八日(八六四))に任ぜられたのを踏まえてのことであろう。中納言の兼任で、すでに任国に下る風は廃れていたが、陸奥への関心を深めたことは想像される。

みちのくのしのぶもどずり誰ゆゑに乱れむと思ふ我ならなくに
の詠もある。諸書に載る作庭ながら、それにかけた主の心情を、これほど巧みに再現したとみられるものはない。「かたゐの翁」が、その「塩釜浦」に寄せて、

(古今724
恋四)

塩釜にいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はここに寄らなむ

と詠んでいる。それは折から、河原院の宴遊に連なる人びとすべてに通う思いであろう。都と遙かなる陸奥とが、この「塩釜浦」に一体化して、夢幻の境をつくるかのようである。都人の陸奥への共感と傾倒は、このように融を有力な先縦として、多彩を加えることになるのである。

次の段階でその機縁となるものに、陸奥の風俗からの大歌への採収がある。『古今集』巻二〇「大歌所御歌」に、「東歌」として「陸奥歌」七首が頭初に載っている。頭初の排列といい、また歌数上も相模一首・常陸二首・甲斐二首・伊勢一首と、他の国風歌よりはるかにまさることといい、『万葉集』とは格段である。地方歌謡として国風の原形の知られるのは、七首の中の五首である。それを対照しながら示すと、次のようになる。

あはれや あぶくまに 霧立ちわたり 明けぬとも せなを

ばやらじ 待てばすべなしや

あぶくまに霧立ちくもりあけぬとも君をばやらじ待てばすべなし

(1087)

わがせなを 都にやりて しほがまの まがきのしまの 待

つぞわびしき

わが背こを都にやりてしほがまの籬の島の待つぞ恐しき

つゆは 雨にまされりや

みさぶらひ みかさとまうせ せや みやぎのの 木のした

もがみ川 のぼればくだる いなふねの いなにはあらずや

しばしばかりぞや あの

最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり

きみをきて あだし心を わがもたば やなよや すゑの

松山 浪も越え 越えなむや 浪も越えなむ

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪も越えなむ

原歌の明らかでない二首は、

みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟の綱手かなしも

(1088)

をぐる崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを

(1090)

となつてゐる。前歌は伊勢物語八一段の塩釜讚美に通じ、後歌は一

四段に転用されている。

国風の原形は、民謡らしく難子詞・反復がみられ、措辞の上でも

ひなぶりととなっている。大歌による宮廷化は、その点の改変にあつたとみていい。較べてみると、さすがに詩型感の上で著しく、原歌の詩情を鮮やかに盛りあげている。宮廷歌として都人に好感されたことは、明らかである。「神遊びの歌」の中にも、陸奥の名所が一首含まれている。

みちのくの安達の真弓わが引かば末さへ寄り来しのびしのびに

(1078)

「安達の真弓」は、前述『万葉集』「安太多良ま弓」とあつたもの、神事の歌舞の詞らしい反復が、やはりみえている。

さて、「陸奥歌」七首は、それぞれに出色であり、『古今集』の一部を占めて、一段と陸奥への浪漫と幻想を身近にする資となつた。ことに阿武隈川・宮城野・最上川・末の松山・籬島の五首は後流に影響するところ大きく、その名所による詩情を決定したの感がある。貫之は仮名序に、名所の表現機能の特筆した中に、「あるは松山の浪をかけ」とこの陸奥歌を加えている。歌書などの所引もすくなくない。次は、その一斑である。

阿武隈川 能因歌枕広本「国々の所々名」／初学抄「所名」／

歌林良材集／綺語抄中「人倫部」

宮城野 古今六帖第一「露」／源氏物語「逢生」(下旬)／新

撰髓脳／初学抄「所名」

籬島 古今六帖第三「しほがま」／俊頼髓脳／初学抄「所

名」／袖中抄第九「しほがまの浦」

最上川 古今六帖第五「思ひわづらふ」／初学抄「所名」／

袖中抄第二二「いなふね」／俊頼髓脳／綺語抄中「財貨部」

末の松山 初学抄「所名」／袖中抄第一八「すゑのまつ山」／歌林良材集「有由縁歌」

『古今集』には、ほかに次の陸奥の名所を詠んだ歌がある。

浦ちかく降りくる雪は白浪の末の松山越すかとぞ見る(冬、326 興風)

みちのくにありといふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり(恋三、628 忠岑)

名取川瀬々の埋木あらはればいかにせむとかあひみそめけむ(同、650 誠人不知)

みちのくの安積の沼の花かつみかつみる人に恋ひやわたらむ(恋四、677 誠人不知)

宮木野のもとあらの小萩露を重み風を待つこと君をこそ待て(同、694 君まさ)

君まさで煙絶えにし塩釜のうら寂しくも見え渡るかな(哀傷、852 貫之)

この六首である。興風は、沖から浦へ降りながら近づく雪に高い

白波を連想、陸奥歌「越さじ」を転じて「越すか」とする。典拠が

恋歌なのに叙景歌に仕立てたのは、この時期珍しい。忠岑は、名取

川から懸詞の連想で、「なき名取り」の意に懸けて、景物「埋木」を配して二句

川は、やはり「名取り」の意を懸け、景物「埋木」を配して二句

までを「あらはれ」の序とする。「安積の沼」も景物「かつみ」を

交えて、上三句が「かつみ」の序となっている。「宮木野の」は、

景物「小萩」を擬人して、「待つ」の譬喩としている。最後の貫之

の

の

の

は、融歿後の河原院の寂寞を詠んでいる。「煙」は藻塩の煙、「塩釜の浦」「うら寂しく」と「うら」を懸詞にして、「見え渡る」と人けなく広がる空間を描いている。このほかに前述、信夫郡銘産の「しのぶもちずり」(袖中抄、第一)を「乱れ」の序とした融の歌が加えられる。風流の貴公子の面目があふれているようである。

このように『古今集』で緒についた陸奥の名所は、のちの撰集に次々と開花を示した。撰集ごとにその主なものを一覧にすると、次のようになる。

後撰集 小斑(陸前国/雑人不知 1253)

衣川(陸前国/兼近 1161)

武隈松(陸前国/雑元善 1243)

松が浦嶋(同/雑性 1094)

勿来関(岩城国/兼多郡/恋小八条御息所 683)

拾遺集 浮嶋(同/兼能直 458)

白河関(岩代国/兼旅 339)

安達原(同/兼別 559)

後拾遺集 緒絶橋(志田郡/恋道雅 751)

松嶋(同/恋 828)

金葉集 衣関(陸前国/兼寛雅 5)

千載集 雄嶋(陸前国/恋富門院大補 884)

十綱橋(岩代国/兼信夫郡/恋隆 715)

新古今集 野田玉川(陸前国/兼冬 643)

十布浦(岩城国/兼双葉郡/恋為仲 930)

このほかに、栗駒山(陸前国/古今六帖)朽木橋(岩代国/堀河百首)千賀浦(陸前国/道綱母集 5)などをあげることができる。

これらの名所群は、大和・山城・摂津・近江など、畿内・近隣の諸国には及ばないが、その次に位する有数なものである。『紫式部集』に、次のような例がある。

世のはかなきことを歎くころ、陸奥の名あるところへ書きたるをみて、塩釜の浦

見しひとの烟となりし夕べより名もむつまじき塩釜の浦(同集 48)

詞書によると、陸奥の名所を書き連ねたものがすでに流布していたようである。この地への好尚をうかがうことができる。

遠国名所が忌避(八雲御抄)される歌合にも、最初の名所題による

『長久二年五月一二日庚申(一〇四)』祐子内親王名所歌合』に、名取川が撰題されている。陸奥名所が詠まれる機会は漸増する。

永久三年一〇月六日(一一一五)には、陸奥名所のみの撰題によって、『内大臣忠通後度歌合』が披講される。衣川・宮木野・塩釜

浦・白河関・末松山・忍里の六題は明らかに代表的な名所である。それほどに陸奥が、歌の世界に不可欠な素材・诗情を供することに

なったのである。

名所詠と密接する名所絵の場合にも、陸奥に画題が求められる例はすくなくない。浮嶋の五例を筆頭に、安積沼(4)・塩釜・勿来

関・籬島・宮城野(各2)・栗駒山・末松山各(1)となっている。春日野(12)住吉(11)吉野山(7)逢坂関(7)などとは較べら

れないが、浮嶋は、難波・佐保山・高砂と並ぶ数字である。辺境の名所が、このように関心されたことは注目には値するのである。絵と歌とを合わせもつ中世初頭の『最勝四天王院障子和歌』(承元元年二月七)では、陸奥は六題、白河関・安積沼・安達原・阿武隈川・塩釜浦・宮城野となっている。国別では、陸奥は山城と同数で、摂津の七例に次ぐ数字を示しているのである。

このように陸奥は、和歌史の中に着実に固有な位置を占めるに至った。万葉陸奥歌を始源としながらも、『古今集』を重要な契機として著しい展開を示した。都人の浪漫は、この陸奥に風雅の標識として、伝統ある抒情を形成した。辺境に点在する名所の数々は、「名ある所」として認知され、後発の文学に師表とされるほどになったのである。個々の名所の表現をみれば、さすがに時代の推移による変化があった。趣向的なものから情趣的なものへ、叙情本位より叙景を本位にと、歌の技法の精度も加わり、新風に託される詠歌の理想ともかかわって、名所本来の視覚的空間に独得の範疇を建てたのである。

因みに、能因は「みちのく」への旅に、白河関・信夫・武隈松・名取川・宮木野・塩釜浦・末松山・象潟を詠んでいる。また別に、「想像奥州一〇首」(家集140、149)があり、右のほかに三江浦・籬島・なてしこの山・姉齒橋・野田玉川が詠まれている。

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関(後拾遺 秋上 518)

この歌はもとも知られ、『袋草子』(雑談)に物議をかもしたが、万寿二年(一〇二五)春の下向(家集 101)であったようである。ついで

で西行は、康治二年(一一四三)ころと文治二年(一一八六)の二度にわたって下向している。「修行」(家集126)の文字もみえるが、同族藤原秀衡を訪ねるためであったとみられる。その西行は、白河関に先人能因を忍んで、「霞と共に待ることの跡辿り詣で来にける心一つに思ひ知られて」(家集27)と、感慨を次の歌に託している。

都いでて逢坂越えし折までは心かすめし白河の関

そしてみずからも、「信夫の里より奥へ二日ばかり入りて」と左註される「おもはくの橋」以下、武隈松・名取川・宮木野・塩釜浦・末松山・東稻山・衣川を詠み、出羽・最上川に及んでいる。その途次に、実方の墓とおぼしき野中の塚を訪ねてもいる。『山家集』一四七の名所の中で、「みちのく」は一割にもみたくない。しかし、下向の途次、「いのちなりけり」(雑下今 987)と感を催した晩年の再訪に、西行のこの地への執心があらわれている。

あれはいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮木野の原

(新古今 390)

と大胆な句法をもつ一首は、都での作であるが、さすがに西行ならではのものである。「みちのく」は西行に、古来の都人の憧憬のもとも象徴的な結実をみる事ができるのである。